

本論文は、大学学生自治会成立に至る経緯および学生自治会の初期の活動を、戦前期の学生自治の系譜、戦後の政府・占領軍の民主化政策、学園民主化運動、日本共産党および左翼学生団体の復活等、その背景にあると考えられる諸要素に言及しながら明らかにしていくものである。大学における学生自治会は、政府・占領軍の民主化政策や学生たちの学園民主化運動の影響を受け、敗戦から数年の間に多くの高等教育機関において設立された。学生自治会は60年安保闘争や大学紛争など戦後の学生運動をリードしていき、大学紛争においては多くの大学において学生の自治権や学部の教育改革を認めさせる等、大学史上においても重要な存在である。しかしながら、その発足に至る背景や過程については未だ解明されていない部分が多くある。

戦後の学生自治会の歴史についての先行研究としては、①各大学の沿革史、②戦後学生運動史研究があげられる。①については多くの場合、戦後の組織再編、あるいは学生の歴史として概略が述べられているのみである。②については1970年前後の大学紛争期に書かれたものが多く、全学連など学生自治会連合組織の歴史が中心であり、学生自治会の結成についてはその前史としてわずかに述べられているにすぎない。それら先行研究における初期の学生自治会の評価としては、政府・占領軍によって上から与えられた（所謂「ポツダム自治会」）としているもの、あるいは戦後復活した日本共産党の指導を受けて活動を行っていたとするものも少なくない。

しかし実際には、戦前期の自治活動・学生運動の影響、戦後の民主化運動、占領政策、所謂「進歩的な」教職員の協力など、様々な要素が複合的に重なったことにより、戦後の数年間の間に全国的に学生自治会組織が作られていったと考える。そこで本論文においては、個別大学の資料のほか、日本占領関係資料、戦後日本共産党資料など、多様な資料を用いて多角的にアプローチすることによって、戦後の学生自治会の成立過程およびその初期の活動について解明していく。

本論文は全6章構成であり、各章の概要は以下の通りである。第1章では、戦後の学生自治組織成立の前史として、東京帝国大学・京都帝国大学・早稲田大学を中心に、明治―昭和戦中期における学生自治組織確立・改革の動きについて述べていく。具体的には、旧制大学における学友会組織の結成と、大正―昭和初期における左翼学生による学友会改革運動・学生自治運動、および戦中期における学校報国団への再編について述べていく。第2章では、戦後の学生自治組織成立の背景にある、政府・占領軍の民主化政策、学生たちの戦後学園民主化運動、日本共産党および左翼学生団体の復活、およびそれらを背景として結成された学生自治組織の概要について述べていく。第3章では、1948-50年における全国的な学生運動の高揚と、その背景にある政府・占領軍および日本共産党の動き、および1950年の共産党分裂後の学生自治組織の分裂について述べていく。第4章以降は、個別大学における学生自治組織の結成・分裂・再編の動きについて見ていく。第4章では東京（帝国）大学、第5章では京都（帝国）大学、第6章では早稲田大学の事例について述べていく。

本論での分析によって見えてきた発足当初の学生自治組織と学生運動の特質は以下の通りである。まず（1）学生自治組織について、戦後の学生自治組織再編・結成の最初の契機となったものは、1945年9月に文部省が発した通牒「校友会新発足ニ関スル件」であるが、同通牒は戦時中の学校報国団組織を、

戦前の学友会組織に近い校友会に編成し直すよう指示したものであって、学生自治組織の結成を指示したのではない。また、占領軍は旧制中等学校・新制高等学校における生徒自治会の設立に関しては、CIE や軍政部を通じて直接的な指導を行なっていたことがすでに明らかになっているが、大学の学生自治組織については具体的な指示や指令は出していない。よって、この時期の学生自治組織を、上から与えられた所謂「ポツダム自治会」とする先行研究の指摘は誤りである。戦後の学生自治組織は、戦後の民主化の流れの中で、多くの場合学生たちが自主的に結成・再編していったものである。発足当初の学生自治組織は、戦後復活した社会科学研究会や日本共産党学生細胞など、左翼学生団体所属の学生たちが中心となって運営していたが、当初は共産党の指示も受けておらず、政治色も強くなかった。しかし、48年に共産党が学生運動に対して直接指導するようになり、同年秋に全学連が結成されると、次第に政治色を強めていった。

次に(2)学生運動について、発足当初の学生自治組織による学生運動は、学園復興や学生の生活問題など、学内問題が主であった。48年以降は、大学理事会案・大学法反対運動やレッド・パージ反対運動など、政治問題にも関与するようになっていき、他大学の学生自治組織や学外の労働組合などとも連携して運動を行うようになっていった。ただし、政治運動といっても、当該時期は大学や学生自身に関係する問題に対してのみ運動を行なっていた。それらを大別すると、①大学法反対運動に代表される大学の自治を守るための運動、②レッド・パージ反対運動に代表される共産主義者弾圧に反対する運動、そして朝鮮戦争が始まってからは③平和擁護運動も行なわれた。それらは戦争と戦後民主主義を直接体験してきた学生たちが、再び戦争やそれに伴う思想弾圧に向かう流れに抵抗するために起こした運動であった。